我が人生に悔いなし

片貝孝夫

目次

[第１章 誕生から小学校入学まで 5](#_Toc414974144)

[群馬県の岩島村で誕生 6](#_Toc414974145)

[はじめての写真 7](#_Toc414974146)

[父に本を読んでもらう 8](#_Toc414974147)

[第２章 小学校時代 9](#_Toc414974148)

[わがままで泣き虫 10](#_Toc414974149)

[弟の死 11](#_Toc414974150)

[新聞に載った詩 12](#_Toc414974151)

[第３章 中学・高校時代 13](#_Toc414974152)

[剣道部とブラスバンド部の掛け持ち 14](#_Toc414974153)

[工業高校へ 15](#_Toc414974154)

[恥ずかしかった弁当 16](#_Toc414974155)

[電気工事士の資格を取る 17](#_Toc414974156)

[第４章 東京での就職 19](#_Toc414974157)

[就職・電子計算機導入準備室 20](#_Toc414974158)

[遅れてやってきた大学生活 22](#_Toc414974159)

[一目惚れから結婚へ 23](#_Toc414974160)

[最初の転職 25](#_Toc414974161)

[第５章 起業と挫折 27](#_Toc414974162)

[片貝システム研究所設立 28](#_Toc414974163)

[事業の失敗 29](#_Toc414974164)

[再度の転職 30](#_Toc414974165)

[第６章 初孫の誕生から今日に至るまで 31](#_Toc414974166)

[初孫誕生とチェロ 32](#_Toc414974167)

[マイホーム 33](#_Toc414974168)

[今が一番いい 34](#_Toc414974169)

[自分史　年表 35](#_Toc414974170)

第１章  
  
誕生から小学校入学まで

## 群馬県の岩島村で誕生

私は、終戦の翌年の１９４６（昭和２１）年１０月７日に、父３１歳、母よし２８歳の長男として、群馬県の岩島村で生まれた。

「孝夫」という名前は、「土」と「ノ」と「子」で「孝」になるので、「土に親しむ子供」という思いを込めて父親が付けた。「親孝行せよ」という意味かとずっと思っていたが、そうではなかったことを父から聞いたのは、私が５０を過ぎてからだった。

父母は１９４３（昭和１８）年に結婚した。父が２３歳から５年間、自動車兵として中国へ出征し、２８歳で帰ってきたときに、母親から「すぐに結婚しなさい」と言われて結婚したそうだ。母は父の家の裏に住む６人兄弟姉妹の長女だった。

新婚生活は両家のある山の上からずっと下にあった曽祖父が使っていた別宅で始め、翌年姉を産んだ。

両親は実家から田んぼと畑と山林を少しずつ分けてもらい、農業を始めた。しかし、農業をするには毎日山の上の実家の近くにある田んぼまで上らなければならず、とても不便だったので、それぞれの両親の家のすぐ近くに新築した。私は、そこで生まれた。

新築した我が家には両家の祖父母が毎日入れかわり立ちかわり訪れる、笑いの絶えない実に明るい家庭だった。近所の噂話や人の悪口は一切口にしない、そんな家庭だった。

## はじめての写真

私には、生まれた時の写真がない。終戦後の混乱の中で生まれたため、４歳まで写真がないのだ。子供が生まれても写真を撮る余裕などなかったのだろう。とても残念なことだが、仕方がない。

しかし、姉は昭和１９年の戦中生まれだが、出生時の写真はある。そのため思春期の頃に、「自分は貰いっ子ではないか」と密かに思っていたことがある。

はじめての写真は４歳９ヶ月の夏祭りの時、父と一緒に撮ったものだ。このときの夏祭りを、よく覚えている。写真は、夏祭りの帰りに叔父が撮ってくれた。今では写真の下が切れてしまったが、私には一番大切な写真である。

写真には父の筆跡で「昭和三十二年七月岩下祇園祭ニテ　瀬市叔父宅庭前デ写ス　孝夫　四才九ヶ月」と裏書がある。

## 父に本を読んでもらう

４歳の頃は２歳下の妹も生まれ、一男二女で笑いの絶えない明るい家庭だった。父にせがんで『アルプスの少女ハイジ』や『ジャックと豆の木』を、もう暗記しているのに何度も何度も読ませたという。

第２章  
  
小学校時代

## わがままで泣き虫

当時幼稚園はなく、野原で６歳まで毎日遊んでいた生活が一変して６０人の同級生がいる集団生活が始まった。

両親の祖父母もすぐ近くに住んでおり、甘やかされて育ったため、学校でもわがままで泣き虫だった。弱いくせに負けん気だけは強いので、いじめられてよく泣いていた。

学校に行くのが嫌で、畑の作物の中に一日隠れていて学校を欠席したことも何回かあった。

１９５３（昭和２８）年、小学校入学の記念写真。裏にびっしりと先生と同級生の名前が書いてある。



## 弟の死

小学校３年の１２月、次男として生まれていた弟が１２月の冬の池に落ちて死んだ。その日のことは今でも鮮明に思い出せる。

その日から、自分たち家族と他の人たちとは別世界の人間のようだった。慰めの言葉が辛かった。いかにもといった慰めの言葉をかけられると、泣き叫んで殴りたくなった。「あんたは関係ないんだから黙っててくれ」と。

物心がついてきたばかりの身に降りかかったこの災難を受け止めることは到底無理だった。可愛がっていた犬が死んだとき可愛そうだったと慰めてくれる友といたが、その精一杯の慰めも、当時は怒りを覚えた。母は半狂乱となり、父は悲しみをこらえる日々がそれからずっと続いた。学校では授業がまったく見に入らず、ほとんど聞いていなかった。とうぜん３学期の成績はガタガタだった。

## 新聞に載った詩

６年生の時は、家で鉛と錫を溶かしてハンダを作ろうとして生の篠竹に溶けたハンダを流し込んで水蒸気爆発を起こし、顔に大やけどを負い、あわや失明かと思われたがそうはならなかった。しかし、やけどのあばたはその後数年残った。

小学校時代はスイカや梨などを盗んだり、地区同士で喧嘩をしたりと、とにかく殺伐とした日々だった。

ひとつだけ楽しい思い出がある。それは４年生の時書いた詩が、毎日小学生新聞で佳作になり、写真のアルバムをもらったことだ。校長先生から全校生徒の前でもらった。単純な詩だ。今でも覚えている。

ぼくは左ぎっちょだ

でも左ぎっちょの人が

メンコをしていると、

とても面白い

ぼくは自分が

どのくらい面白いのか

分からない

第３章  
  
中学・高校時代

## 剣道部とブラスバンド部の掛け持ち

中学時代は、小学時代が嘘のように楽しかった。まず、伯父の勧めで剣道部に入った。剣道は小学生の頃から寒稽古で素振りはさせられていた。伯父はしょっちゅう学校に剣道を教えに来た。どんな手を使っても伯父には手も足も出なかった。それほど強かった。

教えに来るのは伯父だけではなかった。みな４段とか５段とかで、とにかく強かった。おかげで岩島中学校の剣道部は郡で一番強かった。２年生で初段を取った。いつも県大会に行った。でも、県大会で勝ち進むことは難しかった。剣道部では主将だった。

ブラスバンド部にも入った。１年生で大太鼓、２年生からクラリネットを吹いた。ほとんど行進曲と校歌などだが、ブラスバンド部で一番熱心だったので、３年生の時は主将だった。だから忙しかった。

中学校はふたつの小学校が一緒になったので１学年１２０人いた。あれから５５年経った今では、全校生徒で６０人だそうだが。とにかく学校始まって以来の元気な学年だったらしい。

なんでも自主的に活動した。３クラスあったが、常にクラス間の連絡は密に取っていた。クラスごとに文通箱を設けて、手紙を交換し合ったりした。女の子にも出したりした。とにかく毎日何か書いていた。揉め事も時々あったが皆で解決した。実にまとまりのよい学年だった。みんな仲が良かった。

今でも集まりがあると４０人くらいはすぐに集まる。中学時代の仲間は宝物のようだ。

## 工業高校へ

３年生になって進学組と就職組とに分かれた。仲のよかった２人が就職組に行って、校庭で自動車を整備したり運転したりしているとき、校舎で英語の勉強をしていたりした。

そして、受験先を決める時期が来た。私はこんな田舎で農業を継ぐのは嫌だと父に言い放った。父は許さない。農業高校に行ってあとを継ぐのが当然だと言う。私は嫌だと言った。普通高校に行っても大学に行かせる金はないとも言われた。

父の母が「孝夫の好きなようにやらせなさい」と父に言って、父は折れた。しかし、高校を出て働かねばならないから普通高校は不利だと考えて、工業高校を選んだ。一番就職に有利そうな電気科を選んだ。理科は好きだったからそれでよかった。

楽しい中学時代に別れを告げ、それぞれバラバラとなった。だいたい４つの高校と就職組に分かれた。私は列車で４０分もかかる渋川工業高校に入った。毎朝６時半の電車に乗るので、５時半には起きた。

高校の修学旅行。宇治山田駅にて。

## 恥ずかしかった弁当

母は５時に起きて食事の用意と弁当を作ってくれた。弁当はうれしかった。小学校４年生ころから完全給食だったので弁当に憧れていた。

いろいろあとから聞くと、小学校１年の時からプールはあったし体育館もあった。とても裕福な村だったのだと思う。

高校になってやっと弁当になった。ただ弁当で嫌なことがあった。我が家には田んぼが少なく、１年間家族を養うだけの米が取れない。畑に大麦を育てて、少量の米と大量の麦との麦飯だった。

それを人に見られるのがとにかく恥ずかしかった。母に、炊き上がったご飯の底のほうの白米の多い部分を弁当に詰めてくれるようにいつも頼んだものだ。

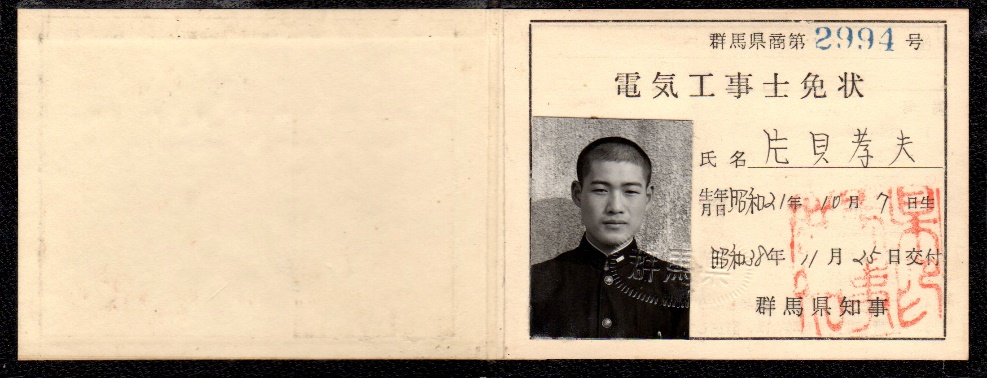
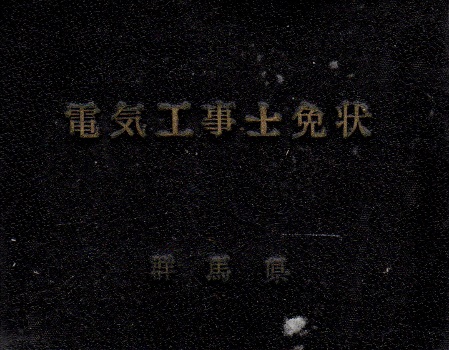
今考えると自分が嫌になる。

## 電気工事士の資格を取る

高校では剣道部に入った。中学校で散々剣道をやってきたので、高校の剣道部では３年生も私には勝てなかった。レベルが低かった。すぐに２段を取った。それで興味を失ってしまって、だらだらと３年間を過ごした。

しかし、郡の剣道大会に出て、警察官などもなぎ倒して優勝したこともあった。剣道では伯父の血を引いていたのだと思う。

高校２年の時、電気工事士の資格を取った。筆記試験と実技試験があって、実技試験では鉛の管を曲げて中に電線を通すような工作もして、図面通りに、法規に則った工事をしなければ失格となる。学校で訓練を積んでいたから制限時間内になんとかできた。その資格を使って、親戚中の電気工事をしてあげたて喜ばれた。



電気工事士免状。一度取ると一生ものの免許。

高校も３年にもなると、世の中のことがわかってくる。なんだ、アルバイトしながら大学にだって行けたではないかと思った。

しかし、高校では電気の専門科目を学ぶのが大半で、大学受験に必要な勉強などほとんどしない。失敗したと思った。会社に入って夜学に行こうと思った。すると先生が、「先輩が就職して頑張っているのに、就職と同時に大学に行くとはいかがなものか」と反対された。

そこで、東京の電機メーカーにまずは就職することにした。

第４章  
  
東京での就職

## 就職・電子計算機導入準備室

私は東京の東証一部の上場企業に就職した。とにかく家を出たかったので、東京に来て、墨田区にあった鉄筋５階建ての真新しい独身寮に入ったときはほんとうに嬉しかった。４月から３ヶ月みっちり研修があった。工場実習が一番楽しかった。冷蔵庫の流れ作業で部品を装着したり、旋盤やボール盤、フライス盤なども扱わせてもらえたりした。レポートも実にマメに書いた。これは今でも宝物だ。

実習が終わって配属先を決める段階で、希望を聞いてくれた。見慣れない職種があった。「電子計算機導入準備室」と書いてあった。どうせやるなら未知の世界がいいとばかりに、躊躇なく希望した。あとで聞いたら高卒のオペレータを募集していたらしい。

ともあれ、電子計算機導入準備室には各部門から若手の業務経験者が数人集まっていて、現場にヒアリングしては業務フローを書き、コンピュータ化する部分を切り出して行った。組織変更も考えながらだから、作業はなかなか進まない。１８歳の私も一緒についていって同じことをした。

その後、私には特別な任務が与えられた。３５００人の社員の給与計算である。それからというもの、人事部に入り浸って給与計算や所得税の計算、社会保険料の計算、年末調整の計算、ボーナスの計算などを覚えて、システム設計をし、プログラム設計をしてからプログラミングをし、テストを繰り返した。

その結果、会社で一番初めにリリースするシステムとなって、社長のテープカットからスタートした。

１９６６（昭和４１）年。電機メーカーに就職。キーパンチマシンの前にて。



## 遅れてやってきた大学生活

入社した年の夏から予備校に通いだした。大学受験のためだ。水道橋の研数学館で、土日に学んだ。高校で終わるのは嫌だった。

翌年、東京理科大学理学部二部物理学科に入学した。会社が８時始まりで、４時４５分に終わるので、５時頃飛び出すが、授業が５時半から始まっているので、いつも遅刻だった。最初の３０分の遅刻は痛い。高校と違って大学の物理は数式ばかり。ついていくのがやっとだった。いや、落ちこぼれに近かった。

入学したばかりの時、休み時間にサークルの誘いが来た。男女数人が教壇に立って歌い始めた。「いざたて戦人よ」だ。勇ましい男声合唱。一気に、高校時代に封印していた音楽への思いが溢れた。すぐに入部した。「コールブルンネン、合唱の泉」というサークルだった。

秋には二部六大学合唱連盟の発表会があり、それにも出た。夢のような世界だった。夏には合宿もあり、楽しい大学生活を送った。

そのため落とすと落第になる基礎物理を１年の時に落として留年した。２年の必修科目が受けられない。やむなく教職を取った。だから今、高校の物理の教員免許状を持っている。

大学は５年かけて卒業した。仕事も楽しかった、大学も楽しかった。

大学の仲間。

## 一目惚れから結婚へ

２０歳の時、会社の仲間とスキーに行くことになった。男が多くてつまらないということで、同期の女性が、女子高時代の仲間を連れてきた。その中の一人の女性に一目惚れしてしまった。それまで、女性と付き合うなど面倒くさいとしか思ったことなかったのに自分で驚いた。

スキーは子供の頃からやっていたので、どちらかというと教える立場だった。転んだ彼女を起こしてあげたりして、それ以来時間のやりくりをしてデートを重ねた。

３年が経ち２３歳になった。もうこれ以上だらだらとお付き合いするのは失礼だと思った。「男たるもの結論を出さないと」ということで、まだ大学生でもありながら結婚を決意した。

私はその頃キリスト教の教会に行き、洗礼も受けていた。彼女も教会の幼稚園で働くようになっていた。そこで教会で結婚式を挙げた。中学校時代３年間担任だった女性の先生も、はるばる群馬から来てくれた。職場の人も大学の仲間も来てくれた。手作りの質素な結婚式で、ほとんどお金をかけなかった。その分多くの方にお世話になり、何の恩返しもできないまま今に至っており、思い出すと冷や汗が出る。



新婚旅行は妻との出会いの場でもあったスキー旅行へ。



１９７０（昭和４５）年３月１５日、浅草の教会で結婚式。

## 最初の転職

大学の卒業のかかった試験に合格したときは、嬉しくてすぐに妻に電話した。会社も好きだったので、会社の学歴変更試験を受けた。高卒から大卒への身分の切り替えだ。今考えると変な制度だと思うが、勤労学生も多い時代だったので、そういう制度があった。

そして会社でも、めでたく大卒の資格を得た。そのとき妻は妊娠していて、７月が出産予定日だった。給料は安いしこれから大変だなと漠然と思っていた。ふと新聞の募集欄に目が止まった。SE募集とある。給料が５万円と書いてある。私がそれまでもらっていた給料は２万円台だった。○○○○○○という会社で、神保町の×××ビルに会社があった。

にわかに夢が膨らみ受験してみた。身分切り替えしたばかりの５月だった。合格した。独立系のソフトウェア会社としては日本で最初の会社だった。それから悩んだ。一部上場企業から小さなソフト会社に転職するのだ、しかももうすぐ子供が生まれる。

そのとき死んだ弟のことを考えた。父母に誓った言葉を思い出した。「克彦の分も生きる」。夢に向かって生きようと、子供が生まれる前に決断して、ずっと保留していた返事をした。

とてもお世話になった上野部長にトイレで会った。「辞めるのか」と聞かれた。「すみません」と答えた。「まあ、いろいろ考えて決めたことだろうから」と言われた。嬉しかったのと申し訳ない気持ちで涙が溢れた。

決断してから長女の愛子が生まれた。可愛かった。義母がしょっちゅう来てくれた。それもうれしかった。

第５章  
  
起業と挫折

## 片貝システム研究所設立

## 事業の失敗

## 再度の転職

第６章  
  
初孫の誕生から今日に至るまで

## 初孫誕生とチェロ

## マイホーム

## 今が一番いい

今では、個人事業主登録をして、何社かの顧問をしている。

また、ボランティアで勉強会もいくつかやっている。社会への恩返しだ。

生まれ故郷の岩島中学校が廃校になるという。そこを使った活性化も町長に提案し採用された。

これからはそちらの仕事がメインになっていくと思う。

「人生もう一度やり直せるとしたらどの時代に戻りたいですか」という質問を受けたことがある。どこにも戻りたくない、今が一番いい。精一杯生きてきた。これからも精一杯生きる。それでいいと思っている。

素晴らしい人生をありがとう。弟の分も生きてきたという実感がある。

## 自分史　年表

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | 出来事 | 世の中 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 1946 | 昭和21 | 0 | 10月7日、誕生 | 男女平等総選挙 |
| 1947 | 昭和22 | 1 |  | 日本国憲法施行 |
| 1948 | 昭和23 | 2 |  | 極東国際軍事裁判 |
| 1949 | 昭和24 | 3 |  | 湯川秀樹ノーベル賞 |
| 1950 | 昭和25 | 4 |  | 警察予備隊 |
| 1951 | 昭和26 | 5 |  | 民間放送開始 |
| 1952 | 昭和27 | 6 |  | メーデー事件 |
| 1953 | 昭和28 | 7 | 岩島第二小学校入学 | NHKがテレビ本放送 |
| 1954 | 昭和29 | 8 |  | 自衛隊発足 |
| 1955 | 昭和30 | 9 |  |  |
| 1956 | 昭和31 | 10 |  | 国際連合加盟 |
| 1957 | 昭和32 | 11 |  |  |
| 1958 | 昭和33 | 12 |  |  |
| 1959 | 昭和34 | 13 | 岩島中学校入学 | 岩戸景気 |
| 1960 | 昭和35 | 14 |  | カラーテレビの本放送 |
| 1961 | 昭和36 | 15 |  |  |
| 1962 | 昭和37 | 16 | 渋川工業高校電気科入学 |  |
| 1963 | 昭和38 | 17 | 電気工事士免許取得 |  |
| 1964 | 昭和39 | 18 |  | 東京オリンピック |
| 1965 | 昭和40 | 19 | 電機メーカーに就職。電子計算機導入準備室勤務 |  |
| 1966 | 昭和41 | 20 | 大学入学 | 新三種の神器 |
| 1967 | 昭和42 | 21 |  |  |
| 1968 | 昭和43 | 22 |  | 三億円事件 |
| 1969 | 昭和44 | 23 | 結婚 | アポロ月面着陸 |
| 1970 | 昭和45 | 24 |  | 大阪万博 |
| 1971 | 昭和46 | 25 | 大学卒業  長女誕生  ソフトウェア会社に転職 | 円変動相場制 |
| 1972 | 昭和47 | 26 | 次女誕生 | 沖縄返還 |
| 1973 | 昭和48 | 27 |  | オイルショック |
| 1974 | 昭和49 | 28 |  |  |
| 1975 | 昭和50 | 29 | マイホーム入手 | 沖縄海洋博 |
| 1976 | 昭和51 | 30 |  | ロッキード事件 |
| 1977 | 昭和52 | 31 |  |  |
| 1978 | 昭和53 | 32 |  |  |
| 1979 | 昭和54 | 33 |  | 共通一次入試開始 |
| 1980 | 昭和55 | 34 |  | 東北新幹線開業 |
| 1981 | 昭和56 | 35 |  |  |
| 1982 | 昭和57 | 36 | 退職  片貝システム研究所設立　社長 | 東北・上越新幹線 |
| 1983 | 昭和58 | 37 |  | ディズニーランド開業 |
| 1984 | 昭和59 | 38 |  |  |
| 1985 | 昭和60 | 39 |  | 筑波科学万博 |
| 1986 | 昭和61 | 40 |  |  |
| 1987 | 昭和62 | 41 |  | バブル景気 |
| 1988 | 昭和63 | 42 |  | 瀬戸大橋開通 |
| 1989 | 昭和64／平成1 | 43 |  | 昭和天皇崩御 |
| 1990 | 平成2 | 44 |  | ドイツ統一 |
| 1991 | 平成3 | 45 |  | バブル崩壊 |
| 1992 | 平成4 | 46 |  |  |
| 1993 | 平成5 | 47 | 以前勤めていた会社に吸収合併となる　事業部長 | Jリーグ・米の輸入 |
| 1994 | 平成6 | 48 |  | 松本サリン事件 |
| 1995 | 平成7 | 49 |  | 阪神淡路大震災 |
| 1996 | 平成8 | 50 | 人材派遣会社に転職 | 金融ビックバン |
| 1997 | 平成9 | 51 | 新築一戸建入手 | 消費税5% |
| 1998 | 平成10 | 52 |  | 長野オリンピック |
| 1999 | 平成11 | 53 | ソフトウェア会社に転職　副社長 |  |
| 2000 | 平成12 | 54 | Biz/Browserを販売 | 2000円札発行 |
| 2001 | 平成13 | 55 |  | 米で9.11事件 |
| 2002 | 平成14 | 56 |  | 拉致被害者帰国 |
| 2003 | 平成15 | 57 |  | 郵政民営化 |
| 2004 | 平成16 | 58 |  | 新潟県中越地震 |
| 2005 | 平成17 | 59 |  |  |
| 2006 | 平成18 | 60 |  |  |
| 2007 | 平成19 | 61 | 会社顧問に就任  個人でコンサルタント業開始  ブログ開始 | リーマン・ショック |
| 2008 | 平成20 | 62 |  |  |
| 2009 | 平成21 | 63 |  | 裁判員制度 |
| 2010 | 平成22 | 64 |  | はやぶさ帰還 |
| 2011 | 平成23 | 65 | システムイニシアティブ協会設立  副理事長 | 東日本大震災 |
| 2012 | 平成24 | 66 |  | 東京スカイツリー開業 |
| 2013 | 平成25 | 67 |  | 富士山世界遺産 |
| 2014 | 平成26 | 68 | 郷土の町おこしに尽力 | 消費税8% |
| 2015 | 平成27 | 69 |  |  |

我が人生に悔いなし

２０１５年４月１日

片貝孝夫